

# 審判員派遣報告書

1	派遣事業名	2019 U28 Young Officials Camp	2	派遣期日	2020年1月6日～1月8日
3	報告者名	高田 開	4	派遣先	スカイホール豊田

5	大会概要 および 大会結果			
大会名称	B.LEAGUE U15 CHAMPIONSHIP 2020	大会期間	2020年1月6日～1月8日	
大会内容	B.LEAGUE、B3リーグの所属クラブが運営するU15チームによる3日間の優勝決定戦。初日は予選リーグ、2日目と3日目は決勝トーナメントと交流戦を行った。宇都宮ブレックスU15が連覇を果たした。			

6	担当したGame				
No	期日	対戦カード	R/U	相手審判	ゲーム雑感
1	1月7日	京都U15 vs SR渋谷U15	U1	吉住氏(山形) 笹井氏(青森)	前半は両者互角の戦いを見せる。後半に入ってSR渋谷のファウルトラブルから京都が抜け出す。落ち着いてゲーム運びをした京都が勝利。
2	1月7日	信州U15 vs 福岡U15	U2	吉住氏(山形) 山下氏(石川)	序盤から福岡が機動力を生かしたオフェンスで信州を圧倒。信州もゾーンディフェンスで対応するが、最後はダブルスコアで福岡が勝利。
3	1月8日	秋田U15 vs 京都U15	U1	高橋氏(岐阜) 長谷川氏(北海道)	秋田はピック&ロール、京都は1vs1を中心に持ち味を生かしたオフェンスで互いに譲らない戦いを見せる。4Qの勝負所で連続で3Pを決めた秋田に軍配。
4					

## 7 審判会議・その他ミーティング等内容、審判技術・判定基準等に関する事、全体の感想および提言等

### ○講義① 宇田川氏「インテグリティについて」

まず初めに、インテグリティ委員長の宇田川氏よりお話があった。インテグリティの意味は「誠実さ、真摯さ、高潔さ」であり、これはよく耳にするので私も知っていた。今回の講義では、この言葉が生まれたきっかけや目的、また私たちレフリーがこの言葉にどう向き合っているのかを詳しくお話しいただいた。日本のバスケットボール界では様々な問題や不祥事、また体罰などで悪いニュースばかりが先行する時代があった。このままではいけない、日本のバスケットボール界が前に進むために、バスケットボールの価値を高めることを目的としてインテグリティという言葉が発信されるようになった。またレフリーは、バスケットボールの価値を高めるための一員として、Respect for the game(ゲームを尊重する精神)に則ってテクニカルファウルを徹底することが求められる。触れ合いに対するファウルと同様に、ふるまいに関しても競技規則、ガイドラインどおりに判定する必要があると教わった。また同時にレフリーは自身でリスクマネジメントをしなければならない。今は映像やSNSの時代であり情報が瞬時に拡散されるが、その中にはレフリーにとって都合の悪いものもある。ここで重要となるのは、観客がその試合を見てどう思うかを考えること、また起こったことにどう適切に対応するかである。このとき我々レフリーを助けてくれるもの、守ってくれるものが競技規則、ガイドラインであると話しいただいた。そして最後に、レフリーの成長は小学生が九九を覚える子ことと同じであると仰られた。これは、できないことを意識して実践し続けることで、無意識にできるようになってくるという意味であると教わった

### ○講義② 尾形氏 平出氏 堀内氏「3POメカニクスについて」

次に3人の講師から3POメカニクスについての講義があった。メカニクスとは、精度の高い判定を継続するために審判が共通認識しておくためのシステムであるとマニュアルにも明記されている。今回の講義では、リード、トレイル、センターのそれぞれのメカニクスについて映像を用いて解説があった。

#### ●リード

解説があったのは、スイッチサイドのタイミングとプライマリーについてである。まずスイッチサイドのタイミングは、パイプからボールがセンターサイドに移ったときであり、これがベーシックであると再認識した。またスイッチサイドを中止しなければならないタイミングは、クイックショット、クイックドライブ、ショットクロック残り5秒であると確認した。次にプライマリーについてポイントとなる2つのケースを映像を使って解説があった。1つ目はパイプに対してオフェンスが縦に入ってくるケースである。ディフェンスも正面に入ろうとするためビッグインパクトが起こりやすく、レフリーとしてもブロックorチャージの判定を下す準備が必要となる。このようなケースではついついセンターが判定をしてしまいがちだが、プライマリーはリードである。理由は、ディフェンスがどこから来てどのように位置を占めたのかを見られるのがリードであり、すなわちレフリーディフェンスができるのはリードであるためと教えていただいた。(センターが判定することは悪くないが、プライマリーはリードであることを覚えておくなくてはならない)。2つ目は、エッジよりも下で起こるプレイである。特にショットがあったときの3or2とプロテクトシューターの確認はリードのプライマリーであると教わった。

#### ●センター

センターは3POの生命線として、ウィークサイドで起こるすべての現象を判定する。基本的にはサイドラインと平行に体を開き、レフリーディフェンスをするためにクロスステップなどを使って常にポジションアジャストしなければならない。今回は、試合中よくあるケースとして、センターサイドのコフィンコーナー付近でのトラップディフェンスにどのように対応するかを映像を見ながら解説を聞いた。このようなとき、よくセンターを主導にローテーションするという言葉でカンファレンスなどで話をしているが、その考え方は間違いであると言われた。センターサイドのコフィンコーナーでトラップディフェンスがあったとき、センターはあくまでポジションアジャストをするのであって、センターが自らトレイルになるのではなく、リードがスイッチサイドを完了したときはじめてセンターはトレイルになる。すなわち、ローテーションのトリガーはあくまでリードが握るということを教えていただいた。この考え方をクルーで共通認識しておかないと、ボールがセンターサイドのコフィンコーナーからトレイルサイドに素早く展開された時などにローテーションミスが起こってしまう可能性があると感じた。

#### ●トレイル

まずトレイルの役割としては、目の前にいるボールを持ったプレイヤーとそのディフェンスを判定すること、3or2の確認、プロテクトシューターの判定、ショットクロックの管理などがある。またメカニクスとしては、ボールがトレイルサイドから離れたときにcheck out、リードのスイッチサイドと同時にローテーションを開始する(rotate with lead)、ペイントエリアに目を当てること(pic the paint)を確実にしなければならない。ここで解説があったのは、ピック&ロールに対するトレイルとセンターの役割分担についてである。映像で紹介されたのは、トレイルサイドでボールをコントロールしているマッチアップにミドルライン側からスクリーンをかけた場合のレフリーの視野の当て方である。ピック&ロールでは、スクリーナーの正面側と背面側を1人のレフリーが同時に見ることは困難であるため、トレイルとセンターが役割分担が必要である。映像では、スクリーナーの正面側をトレイルが、背面側をセンターが見るという役割分担が行われていた。

分担当する必要が。映像ではユーザーのティンエンスがスクリーンに対して不当に手を使ったのをスクリーンの表側にいたトレイルが判定した。

### ○講義③ 上田氏 加藤氏 漆間氏「映像検証 英語でのディスカッションとプレゼンテーション」

次に、映像を使って英語でディスカッションとプレゼンテーションを行った。私たちのグループでは、事前に配布されていた映像からMechanics(メカニクス)、Presentation(プレゼンテーション)、Judgement(判定にかかわる部分)、Game Control(ゲームコントロール)の4つの観点で気になったケースについて話し合った。これを各自でプレゼンテーション、さらに他班とディスカッションをすべて英語で行った。1か月前から英語の勉強をして臨んだが、実際にこのような場で考えを伝えることはとても難しかった。しかし今回、英語を使ってのプレゼンテーションとディスカッションを経験したことで、改めてこれからは英語が必要になってくるということを再確認した。これからも英語学習を継続していきたい。

### ○担当ゲーム① 京都ハンナリーズU15 vs サンロッカーズ渋谷U15

CC:吉住氏(山形) U2:笹井氏(青森) IR:漆間氏

この試合は3人とも20歳というクルーで臨んだ。プレカンでは、NewリードやCtoCでしっかりと走ることに、スイッチサイドのタイミングはベシクに、初めてのクルーなのでしっかりとアイコンタクトをとって信頼関係を築くこと、各自のプライマリーの判定をしっかりとすることに話し合った。ゲーム前にしっかりとコミュニケーションをとることができたため、落ち着いてゲームに入ることができた。前半は大きなトラブルはなかったが、後半にUFを取り上げたシーンがあった。このとき現場ではC1と判定し、さらにシュートモーション中かつシュートが入ったのでカウント+フリースロー1本で再開した。このとき渋谷のコーチから説明を求められ、コミュニケーションをとる時間が長くなってしまった。ゲーム後、IRの漆間氏よりこのケースについてお話があった。まず判定についてであるが、Newリードがコールした後、近くにいたセンターとコミュニケーションをとって結果C1としたが、ゲーム後にNewトレイルはC4だったのではないかと話した。映像で確認してみると、C4のほうが妥当であった。ここで漆間氏から、何か起こった時に、持っている情報は確実に共有することが大切と教えていただいた。このようなケースでは、情報を持っているのであれば3人で集ってコミュニケーションをとり、クライテリアの擦り合わせと再会方法を確認しなければいけなかった。そうすることでコーチとのコミュニケーションも簡潔にスムーズにできたのではないかと言われた。(もしC4で取り上げたならAOSとみなすことはできないためフリースロー2本+ポゼッションとなる) もう一つ指摘されたのはトラベリングについてである。ドライブを開始するときやショットのためのステップではなく、ディフェンスに影響のない何気ない貫い足に関してもしっかりとトラベリングの判定をしなくてはならないと言われた。

### ○担当ゲーム② 信州ブレイブウォリアーズU15 vs ライジングゼファー福岡U15

CC:吉住氏(山形) U1:山下氏(石川) IR:堀内氏

第2ゲームということで、クルーで第1ゲームでの反省点を共有してゲームに臨んだ。ゲームは序盤から福岡が圧倒する展開で点差が開いた。その中で起こった現象に落ち着いて判定を入れることができた。IRの堀内氏からも前半はよくできていたと言葉をいただいた。EOQ間際でセットオフenseが展開される時は、レフリーはローテーションを早めに完成させてボールサイド2を確実に作ることを意識するとよいと教えていただいた。ゲーム後のミーティングで、1つ処置ミスがあったことを指摘された。ゲームクロックが残り1.6秒でフリースローの2投目が落ちた直後にファウルがあった。この時ゲームクロックが流れてしまった。本来ならばゲームクロックは1.6秒もしくは1.6秒以下に修正しなくてはいけなかったが、クルー3人とも確認ができておらず、残り1.7秒から再開してしまった。この後ブザービーターを狙ったショットもあると考えればとても危険なミスであった。ボールがデッドになった瞬間にゲームクロックとショットクロックをその都度確認することを習慣にしなければいけないと改めて感じさせられた。

### ○講義④ 加藤氏 漆間氏「FIBA/プロフェッショナルレフリーの取り組み」

1日目のゲームを終えた後、漆間氏からプロレフリーの1日と取り組み、加藤氏よりFIBAレフリーへの道のりと現状についての講義があった。

まずプロレフリーの1日と取り組みについて、1週間のスケジュールとゲームがある日の1日のスケジュールの紹介があった。試合のある日以外でも、オフィスでの仕事やトレーニング、会場への移動を含めれば、ほとんどの時間をバスケットボールのために使っていることが分かった。また週末のゲームの準備として、前節担当したゲーム2試合、週末担当するゲームで対戦する2チームの前節4試合の映像を見るという。またゲーム前のカンファレンスでは各チームの特徴、選手の特徴、さらにはチームが前節に吹かれた印象的なファウルなどの確認に2時間から3時間ほどかけて情報共有をする。私はこの話を聞いて、これらの準備はプロレフリーだからできる特別なことではなく、私たちが普段何気なく吹いているゲームでも実践できることなのではないかと感じた。

次にFIBAレフリーの道のりと現状について、少し厳肅な雰囲気でお話をいただいた。現在日本でFIBAライセンスを持つレフリーは13人で、これは世界的にも多い方である。FIBAレフリーになるには、トップリーグを2年以上経験していることを前提に、体力テスト、ルールテストに合格し、かつ初めてFIBAレフリーになるには35歳以下でなくてはならないという条件をクリアする必要がある。しかし条件をクリアするだけでFIBAライセンスが取得できるわけではない。ひとつの国から選出されるFIBAレフリーの数は、前任期中に自国のレフリーが国際大会に選ばれた実績や代表チームのFIBAランキングなどを考慮して決定される。すなわち、FIBAレフリーになって終わりではなく、次の期間に向けて自国の枠を勝ち取りいかななくてはならない。私は今回FIBAレフリーに関するお話を初めて聞いた。私が想像していた以上に狭き門であり、志せば誰でもがなれる道ではないと知って息を呑んだ。

### ○担当ゲーム③ 秋田ノーザンハピネッツU15 vs 京都ハンナリーズU15

CC:高橋氏(山形) U2:長谷川氏(北海道) IR:漆間氏

2日目は講義はなくこのゲームだけだったため2日間の締めくくりとして、これまでの課題にチャレンジできるように準備をした。個人的にこの試合は、とても考えさせられたゲームで、学ぶことが多かった。ゲーム後のミーティングで、処置を間違えた2つのケースについてIRの漆間氏と一緒にどうすべきだったのかを考えた。1つ目は、バックコートでボールをコントロールするプレイヤーが8秒オーバータイムになるギリギリのタイミングでフロントコートにいる味方プレイヤーにパスを出した。このボールをフロントコートにいたディフェンスがカットしてバックコートでアウトオブバウンズとなった。このときショットクロックは14秒になっていたため8秒バイオレーションを宣した。ここでルールブックにある、ボールがフロントコートに進められたときの項目を確認すると、体の一部がバックコートに触れているディフェンスのプレイヤーにボールが正当に触れるとあるため、このケースでは8秒バイオレーションは成立しないことが分かった。もう一つは、バックコートのエンドラインからスローインされたボールをディフェンスがカットして、エンドラインでアウトオブバウンズになりそうになったボールをディフェンスが強く投げ入れたため、フロントコートのサイドラインでアウトオブバウンズとなったケースである。このときディフェンスプレイヤーが投げ入れたことを確認したためショットクロックを24秒にリセットして再開した。しかしディフェンスのコントロールが認められたのであれば、オフenseはフロントコートで新たなコントロールを得たことになるのでショットクロックは14秒から再開するのが正解であった。また、コミュニケーションの取り方についても教えていただいた。コミュニケーションの取り方で大切なのは、相手への答えを求めているかを理解すること、そのうえで適切な回答を簡潔に述べることである。なぜファウルなのか、誰のファウルなのか、何の種類なのか、罰則・再開方法はどうかなどである。またコーチやプレイヤーと信頼関係を築くためにも、相手の言い分を受け入れて話を聞いてあげることも大切であると教わった。(過度なコミュニケーションは禁物)

### ○最後に

私は今回のYOC研修でたくさん新しいことを知った。世界やトップリーグで活躍されている講師の方々から講義やミーティングを受けて、自分が今まで県内で学び実践してきたことで正しかったことやこれから改善していかなくてはならないことに気づくことができた。また全国で一緒に頑張っている同世代の仲間に出会えたことで、お互いに切磋琢磨して頑張っていこうという気持ちになった。

最後になりましたが、今回の派遣に際しましてお世話いただきました四国ブロック、香川県の皆様へ心より感謝申し上げます。YOC研修で学んだことを、意識→実践→継続→無意識化→成長につなげていけるように日々精進します。これからも変わらぬご指導のほどよろしくお願い申し上げます。